



Alacrity 通信

Alacrity 通信 第 5 号 2022.10.28 発行

編集 Alacrity Inc.

<https://alacrity.jp>

東京都大田区西蒲田 8-24-1 TEL 03-5408-9755

このたびは Alacrity 通信 第 5 号を発行いたしましたのでご案内いたします。本コンサートへご来場いただいたお客さま限定で、この物語の主人公ミハイルと綾、演奏された作品と作曲家について、そして編集部コラムでは大正から昭和初期までの日本に西洋文化が取り入れられてきた歴史について 6 回にわたりご紹介いたします。

Original Concert シリーズ

クラシック音楽と日本の歴史

Vol. 1 - The Russians

Violin & Piano Duo ~ 歴史 “Story”

「ミハイル・グリゴリエフの物語」

ミハイル・グリゴリエフ

Mikhail Petrovich Grigoriev

History

グリゴリエフの娘たち — 東西両文化のはざまに生きる

グリゴリエフと綾には 2 人の娘がいました。長女キーラは 1922 年 10 月 27 日、次女ニーナは 1929 年 7 月 14 日、共に東京に生まれています。キーラが生まれた当時の一家は、父方の祖父ピョートル、叔母のシューラ、そして叔父のピーターも交えた大所帯で、母方の祖父母が自宅敷地内に用意した家で暮らしていました。

当時 The American School in Japan に通っていたピーターは、やがて米国カリフォルニア大学バークレー校に進学。学費は奨学金で賄ったものの、渡米のための費用は綾の父寅吉が工面しました。その後、キーラが小学 5 年生になった頃、愛する孫娘たちと静かな晩年を過ごした祖父ピョートルが亡くなり、それから程なくして叔母のシューラはグリゴリエフの親友ベンツェンと結婚し、上海へと引っ越していきました。(のちにシューラ一家はアメリカへ移住)

父方の家族がそれぞれ家を離れたことでキーラはさぞ寂しい思いをしたかと思いきや、彼女は自分の子供時代を「賑やかで輝いていた時代」と述懐しています。近所に母方のいとこが 6 人いたほか母の友人の子供も住んでおり、次女のニーナが誕生したことや、夏休みには毎年、いとこたち全員で母方の祖父母が所有する避暑地の別荘で過ごすなど、幼少期が「とても恵まれていた」環境にあったからでしょう。

父グリゴリエフは、結婚に際して妻の綾にも改宗を求めたほどの熱心なロシア正教徒でしたが、敏腕な実業家として知られていた祖父寅吉は、地域の檀家総代を務めたこともある仏教徒でした。そのため、グリゴリエフと綾の間に生まれたキーラもニーナも、生まれてすぐにロシア正教徒としての洗礼を受けましたが、寅吉の影響から近所の寺院が経営する仏教系の幼稚園に通いました。この祖父母や幼稚園を通じて幾つもの仏教行事に親しんだ経験が、キーラの中に東西両文化の基幹を育んだといえます。



キーラ、綾、ニーナ 東京(1947)

父グリゴリエフも、自らのロシア正教徒としての信仰心や祖国への望郷の念を強めながらも、娘が日本の地で“異教”の文化に生きることについて特に反対はしていませんでした。それは、外見が周囲とは異なる自分たち親子が、日本社会に受け入れられ定着していきけるすべを模索していたからなのでしょう。そうしたグリゴリエフの意思は、1929年のニーナの誕生によって固まったものだと思います。さかのぼって 1923 年に関東大震災を経験した際、ロシアからの家族だけでなく、1 歳を迎えたばかりの長女を抱えて、無国籍であることの心もとなさを覚えたグリゴリエフは、次女の誕生を機に家族を守るため日本国籍を取得したのでした。

東西両文化を大切にしてほしいというグリゴリエフ夫妻の願いは、キーラが進む学校選びにも強く表れていました。叔父ピーターのようなインターナショナルスクールに通うという選択肢もあった中、2人が長女のために選んだのは、当時としては先進的な教育方針で知られていた「自由学園」でした。元キリスト教思想家であったジャーナリスト羽仁もと子と羽仁吉一夫妻によって1921年に創設されたばかりの自由学園は、キーラにとっては自らの基礎を形成した忘れがたい学校だったといます。母である綾は、創設者の一人羽仁もと子が創刊した『婦人之友』に、夫や義妹シューラを通じて学んだロシアの料理や洋裁を紹介する文章を数本寄稿していますが、これには娘を通じて結ばれた縁が背景にあったからでしょう。

一方、妹のニーナは父の非業の死と戦局悪化のために、当時大連で通っていた学校を中退せざるを得ませんでした。実際、父グリゴリエフの死後、母娘は生活のために懸命に働きました。キーラはレストランシェフや清掃の仕事をこなし、ニーナは養蚕農園の手伝いをして、縫い子の内職に就いていた母親を懸命に支えたそうです。やがて日本は終戦を迎えましたが、その2年前に亡くなった祖母が娘の綾と孫たちのために残しておいてくれた財産のおかげで、一家は無事再び東京に戻り、キーラはアメリカ軍のタイピストとしての職を得ました。ロシア人グリゴリエフの血を引くキーラとニーナは、米軍から「今の日本では、“外国人”という立場にいるほうが生きやすい」とのアドバイスを受け、父の祖国ロシアの国籍を仮取得してはみたものの、結局正式な手続きを済ませることのないまま、1949年8月に日本を離れてアメリカへ移住するまで日本人のままで過ごしました。

ロシア人ディアスポラとして生きたグリゴリエフの2人の娘たちは、幼い頃から常に「東西2つの文化」を意識して生きてきたといます。同時に、生まれながらの“国際人”といえるキーラ自身が、アメリカ移住後も自らのルーツを日本に求め、頻繁に自由学園の卒業生たちや学園との交流を持ち続けることで、自らのアイデンティティーを確認していた姿は、日本人ディアスポラそのものだったともいえるのではないのでしょうか。



バイオリンとピアノのためのソナタ 第2番より第2楽章 Adagietto from Sonata for Violin and Piano No. 2

1947～1948年に作曲されたこの作品は、イヴォンヌ・アストリュクに献呈されています。

ジェルメーヌ・タイユフェール

(1892年4月19日 - 1983年11月7日)

フランスの詩人ジャン・コクトーに「耳のマリー・ローランサン」と呼ばれたタイユフェールは、19～20世紀のフランスを代表する女性作曲家であり、教育者でもあります。



最先端の音楽を創作し続けた女性作曲家のハードな人生

1892年、ベルギー（ネーデルラント連合王国）リエージュに生まれたタイユフェールは、幼い頃、一度耳で聴いただけの曲をピアノで弾いて周りを驚かせるほどの天才少女でした。母親マリ＝デジレは、そんな娘にピアノや音楽教育を受けさせ英才教育を施しました。それとは反対に、教養がなく横暴で家庭を顧みなかった父親は、音楽教育への理解などありませんでした。そんな父親への反感からか彼女は後に姓を「タイユフェス」から「タイユフェール」へと改めています。1904年、12歳のタイユフェールは父親の賛成を得ることなくパリ音楽院に入学。父親は、彼女への経済的な援助を打ち切りました。14歳だったタイユフェールは、生徒を教え学費の足しにするなど自立した女性へと歩みだします。

パリ音楽院では幾つかの学科で主席となり、2年後にソルフェージュ賞を獲得するなど優秀な成績を収めました。また、ピアノ科の試験では、当時院長だったガブリエル・フォーレや審査員のドビュッシーを驚かせるほどの才能を見せました。ちなみに最初の作品は、18歳の時に作曲したハーブのための作品でした。

タイユフェールは、音楽仲間のみならず画家のピカソやマリー・ローランサンなど、この時代の芸術家集団と親交を結んでいきます。1917年、タイユフェールはエリック・サティが中心となって結成された若き音楽家グループの一員となります。このグループは、第一次大戦後のフランスにおいて前衛的な作品を称賛する若き音楽家たちでした。1920年、メンバーの中心的存在だったサティが脱退すると、詩人のジャン・コクトー

がメンバーから6人の作曲家を選び、新たな作曲家グループを結成。音楽批評家アンリ・コレの批評がきっかけとなって「フランス6人組」と命名されました。ダリウス・ミヨー、アルテュール・オネゲル、フランシス・プーランク、ジョルジュ・オーリック、ルイ・デュレ、ジェルメーヌ・タイユフェールの6人からなる「フランス6人組」の中で、彼女は唯一の女性作曲家でした。コクトーは、タイユフェールを「耳のマリー・ローランサン」と呼び、彼女の才能を高く評価しました。多様な個性からなるグループは「ロシア5人組」と比較されるなど、この時代のフランスを代表する作曲家グループとして一躍注目を浴びました。

この頃、タイユフェールはルービンシュタインの仲介で、当時世界的に活躍していたジャック・ティボーと出会い、恋に落ちます。ティボーは1905年にアルフレッド・コルトー、パブロ・カザルスと共にカザルス三重奏団を結成して活躍するなど、ソリストとしても有名なバイオリニストでした。1921年、タイユフェールは彼のために『ヴァイオリン・ソナタ第1番』を作曲し献呈。翌年、ティボーはこの作品をコンサートで初演しました。しかし彼女にとって、この恋はとても寂しくつらい経験でした。彼は既婚者だったからです。結局、ティボーから別れを告げられ、この恋は終わります。

1923年、タイユフェールは彼女の作品に大きな影響を与えたフランスを代表する作曲家モーリス・ラベルと出会います。彼女の才能を高く評価したラベルは彼女に個人教授を行いました。そして2年後、ラベルはローマ大賞選抜試験を受験するように勧めます。ところが彼女は、アメリカ人諷刺漫画家ラルフ・バートンと結婚して、ニューヨークのマンハッタンに移住してしま

います。後に彼女はバートンと結婚した理由を「寂しかったから」と語っています。ティボーとの報われぬ恋に疲れていた彼女は、言葉巧みにバートンから誘惑されたのかもしれません。

アメリカでは、人気風刺画家だった夫バートンを通して多くの音楽家や芸術家たちに出会い交流しました。夫の友人チャーリー・チャップリンとの知遇もその一つです。チャップリンは、タイユフェールの才能を高く評価しました。しかしそんなチャップリンからの作曲の依頼のみならず、オーケストラで彼女の作品が演奏される機会などさまざまな音楽活動のチャンスも夫バートンは妨害し奪ってしまうのです。理由は、彼女の才能への激しい嫉妬からでした。やがて彼は日常的に暴力を振るうようになっていきました。1927年、2人はフランスに戻りパリで暮らしますが、夫の嫉妬と暴力に耐えられなくなったタイユフェールは家を出て別居、そして1931年についに離婚。その後バートンは自殺しています。このような出来事は彼女の作曲への意欲を削ぎ、創作にも大きな影響を与え、生活はだんだん苦しくなっていました。しかしその一方で、タイユフェールにとって作曲はその苦しい現実世界からの解放でもありました。

そんな彼女は、寂しさからかバートンと別れた直後に若い弁護士ジャン・ラジェアと出会い交際を始めました。娘フランソワーズが生まれ、2人は1932年に結婚。しかし、この結婚生活でも不幸が訪れます。夫ラジェアもまた彼女の才能を理解することなく、激しい嫉妬から暴力的になっていくのです。次第に娘にも手を上げるようになった夫は後に精神病を患い入院。2人の離婚が成立したのは1950年代初めでした。

このようにタイユフェールにとって1920年代は、激動の時期でしたが、妻の才能と音楽活動に理解の無かった2人のパートナーとの不幸な結婚経験がその後の彼女に自立した女性としてしなやかに生きる強さを与えたことでしょう。

彼女はこの時期、代表作となる『ピアノ協奏曲』や『ハープのためのコンチェルティーノ』、『鳥商人』、『新しきシテール島』などのバレエ音楽の作曲や、先駆的な映画音楽の作曲なども手掛けています。また、親交のあったチャップリンからは映画音楽の作曲を依頼されますが、彼の作曲センスを認めていたタイユフェールは、チャップリンに自分で作曲するよう助言します。こうしてチャップリンは、映画音楽の作曲を彼自身の手で行い映画作品を発表していくこととなりますが、恐らくタイユフェールからのアドバイスや配慮がなければ、実現しなかったことでしょう。

1930年代には、オペラやドキュメンタリーの音楽も手掛けるなど、さらに精力的に作曲活動を行い活躍しました。

第二次世界大戦が勃発すると、タイユフェールは娘を

連れてアメリカに渡りペンシルベニア州フィラデルフィアで過ごしましたが、終戦後の1946年、フランスに帰国し作曲活動を再開します。タイユフェールは戦後の苦しく困難な生活状況の中でも、バレエ音楽、オペラ、オペレッタ、映画音楽、そしてテレビ音楽と多くの作品を作曲しました。この頃1947年から1948年にかけて作曲されたのが『ヴァイオリン・ソナタ第2番』。イヴォンヌ・アストリュクに献呈されたこの作品は、明朗に歌う旋律の第1楽章と柔らかい情感の漂う第2楽章、軽やかな解放感と快活でリズムカルな第3楽章からなる作品で、まさに激動の時代を乗り越えてきたタイユフェールのたくましくもしなやかなエスプリ（精神）を感じさせる作品となっています。この作品の背景には、それまでの彼女の壮絶な人生がありました。

1976年、パリの私立学校「エコール・アルザシエンヌ」の音楽教師となり、彼女は音楽教育を行うとともに作曲活動を続けました。最晩年は関節炎が悪化し、大作から小規模作品の作曲へと専念。亡くなる前年に、パリオペラ座で最後の大作『コロラテューラ・ソプラノと管弦楽のための協奏曲』が初演されています。死の直前まで作曲を続けたタイユフェールでしたが、1983年11月7日、ついにそのハードな人生にも幕が下ります。91才でした。タイユフェールは、19世紀から20世紀の男性優位な社会の中で、どの時代においても揺るぎないチャレンジ精神、そして強靱かつしなやかなエスプリで最先端を走り続けた不屈の女性作曲家でした。



ジャン・コクトーと6人組(デュレを除く)

Alacrity 編集部

編集部コラムは次のページへ

配信期間：URLより各号配信日から30日間閲覧可能（非公開）
2021年 公演ご来場者さま（6～11月まで/月1回）
2022年 公演ご来場者さま（8～1月まで/月1回）

【お問合せ先】
お問い合わせフォーム：<https://alacrity.jp/contact/>
E-mail: music@alacrity.jp





編集部

大

正

モ

タ

ン

コラム



異国からやってきた甘〜いお菓子

開国によって西洋から新しく入ってきたものの一つに洋菓子がありました。明治時代になるとキャンディやチョコレート、ビスケットやスポンジケーキなどが輸入され、人々はその味を知っていきます。といっても、それは上流階級や都市部のハイカラな家庭のお話。一般庶民にはまだまだ手が届かない高級品でした。

そんな中、庶民の手にもお菓子を、現代でもおなじみのメーカーがこぞって国内製造にチャレンジし、今なお愛され続けるロングセラー商品が生まれていきます。先駆けとなったのは森永製菓。日本初の量産キャラメルと、原料カカオ豆から一貫製造された国産第1号のチョコレートを完成させます。紙箱入りの「ミルクキャラメル」は大正3年、「ミルクチョコレート」は大正7年の発売でした。日本人の嗜好に合った日本人のためのビスケットということで生まれた「マリー」も大正生まれのお菓子です。商品名はビスケット好きだったマリー・アントワネットに由来するとか。

子どもたちの健康を願い、江崎商店がグリコーゲン入りの栄養菓子を完成させたのは大正10年のこと。両手を上げたゴールインマークのキャラメル「グリコ」の誕生です。他にも、不二家、中村屋、明治製菓、コロバン等々、多くのお菓子を扱う会社が、大正期に今につながる土台を築いています。

お菓子といえば、西洋から日本に伝わったものの一つに「シュークリーム」があります。幕末に横浜で洋菓子店を開いていたフランスの菓子職人によって伝えられました。シュークリームの「シュー」はフランス語でキャベツのこと。クリームが入ったキャベツ、なるほど確かに似ていますね。「クリーム」は英語ですから、「シュークリーム」は英語とフランス語が入り混じった和製外来語というわけです。ちなみにフランス語では「シュー・ア・ラ・クレーム」と言います。英語では「クリーム・パフ」。シュークリームとそのまま言うと「靴のクリーム (Shoe cream)」と伝わってしまうので注意を。

ふわふわと軟らかいシュー生地の中にカスタードクリームが入ったシュークリームが日本では定番ですが、フランスではこのタイプを店頭で見るとはほとんどないのだとか。日本の元祖シュークリームに近いものは「シュー・ア・ランシエンヌ」と呼ばれ、その意味は“昔風シュークリーム”。しかし、これも日本のものとはかなり違うそうで、フランスからやってきたシュークリー

ムというお菓子は、いつしか日本にどっしりと根を下ろし、すっかり日本のものとなったようです。

ドイツからもおいしいお菓子が伝わりました。木の年輪のような断面から、長寿や繁栄を願う縁起ものとしても人気がある「バウムクーヘン」は、大正時代に第一次大戦による敗戦国の捕虜として来日したドイツ人の菓子職人カール・ユーハイムによって紹介されたものです。

チョコレートから始まったモロゾフも、そもそもの始まりは大正時代に日本に亡命してきた白系ロシア人のフョードル・ドミトリエヴィチ・モロゾフ一家が開いた神戸の洋菓子店でした。後ろ盾も国籍もない異国の地・日本で本場の高級チョコレートを広めたモロゾフ一家ですが、一方で、出資を受けた共同経営者とのトラブルから現在のモロゾフとは袂を分かち結果となってしまいました。お菓子の世界でも新たな芽吹き、進化、そしてさらなるアイデアへの挑戦があった大正時代。日本に来た外国人にもまた、それぞれのドラマがあったのです。

大正12年には関東大震災という未曾有の災害が起きています。死者・行方不明者は推定10万5,000人という、日本を根底から揺るがすほどの大災害でした。しかし、悲しい出来事ではあったものの、その結果、洋菓子の技術者が地方に散らばったことで、洋菓子技術が全国に広がることにもなったのでした。私たちが甘〜いお菓子をほおばった時に感じる得も言われぬ幸せ、それは歴史が織りなす綾がもたらした贈り物かもしれませぬ。



「森永商店」時代のポスター
(1910年)



竹久夢二

【第6号のご案内は、11/25～28の配信となります】